扉のふるまい　-商店街のファサードのリノベーション-

路上利用の活用として、商店街のファサードのリノベーションとそれに伴った内部空間のデザインを行う。
近年、路上営業の緩和や路上利用の社会実験等が行われ、外への利用が活発になってきている。これからの街並みに対してどのような建築の使われ方をするのか考えていきたい。
こうした背景から、建物のファサードが建ち並ぶ商店街を対象として、街並みや建築に豊かな空間を形成することを目的としている。
設計をするにあたって、内と外の境界面である扉に着目した。扉は普段閉じられているものであり開けてもすぐに閉じてしまう。また、開け放したとしても空間の間仕切りにはなっていない。扉が途中でとまり、開けた状態を常に保ちつつ空間に変化を与えられるようにしたい。そこで可動間仕切りに特徴のあるシュレーダー邸を分析すると、既にL字で閉じられていたり、斜めに空間を仕切るなど一般的な操作ではあるが、少し複雑にするだけで大きな効果をもたらすことが研究から導き出された。
そこから私は扉とそれに取りつく柱、迫り出すデッキなど扉に取り巻く様々な建築エレメントを設計した。組柱・壁柱・丸柱など様々なパターンに合わせた扉のふるまいを考えることで、建築と路上の関係を強くし、建築単体だけでない空間の可能性を広げる。

路上規制緩和

日本では、国土交通省による路上営業の基準を緩和する「新型コロナウイルス特例」が行われていて、2020年11月末としていた期限を2021年3月までに延長した。これに伴い、全国約240カ所でテラスの実証実験や路上営業、また路上利用の活用への社会実験等が行われた。感染症の拡大防止のみならず賑わい創出に効果が出ていて、外への利用が活発になっている。
路上規制緩和に伴った建築や街並みの提案として、内部と外部の両方を考えることが重要であり、建築の境界面である扉や建築ファサードに着目する。

路上営業の緩和・延長　日本経済新聞

可動間仕切りの手法

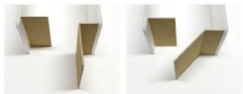
1.L字での閉鎖

床面積が少なくなるが、開口の面が多く取れる。

2.L字のまま回転

開き扉がダイナミックに可動する。

3.開き扉が途中でとまる

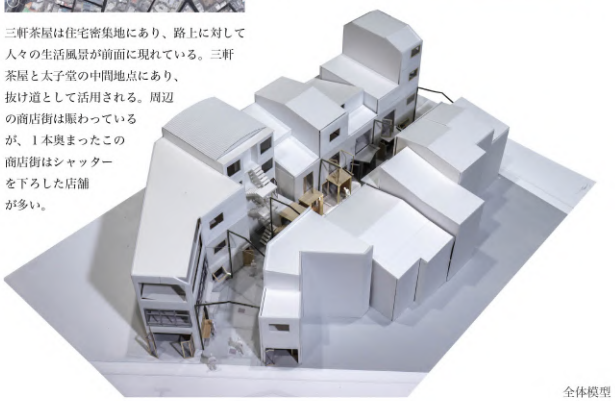


水平や斜めでとまることで、開けた状態を常に保ちつつ空間に変化を与えられる。

シュレーダー邸の分析から得られた建具の開き方を、商店街の開口部に転用させ建築設計を行う。

敷地：三軒茶屋十一番街商店会

三軒茶屋は住宅密集地にあり、路上に対して人々の生活風景が前面に現れている。三軒茶屋と太子堂の中間地点にあり、抜け道として活用される。周辺の商店街は賑わっているが、1本奥まったこの商店街はシャッターを下ろした店舗が多い。



全体模型

L字回転扉のふるまい　-シュレーダー邸からみる可動間仕切りの分析と手法-

可動間仕切りに特徴のある建築の代表作であるシュレーダー邸(1924)を取り上げる。
2階のホールと寝室のL字回転扉について、可動間仕切りのパターンの模型を作成し、分析を行う。

・スケッチでの発見

リートフェルトのスケッチでは様々な空間の組み合わせを表現している。写真の1と2の部分から気になるものを見つける。この動き方は雑誌等では載っていない可動間仕切りの新しい使われ方である。

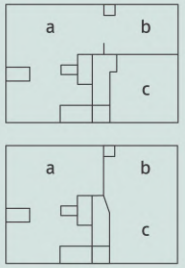
・通常の可動間仕切り

可動間仕切り開放時

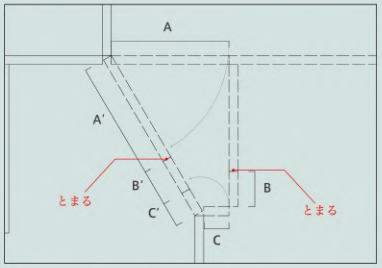
可動間仕切り閉鎖時

通常の可動間仕切りによる空間の組み合わせ。2階のホールと寝室のL字回転扉は他の事例にない特色である。

・1.新たな空間の組み合わせ ― ・2.詳細分析



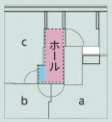
bとcの間のL字回転扉がaの入り口となる扉と重なるように斜めに動いている。



Aの扉とBの扉が外側で斜めに重なり、開いたままとまるようになっている。このような詳細な可動間仕切りの取り合いによって様々な空間の組み合わせを可能にしている。

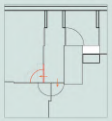
・ホール付近可動間仕切り

二階平面図①



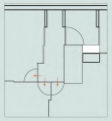
一般的に可動間仕切りが閉じ、L字のホールができる。ホールは通常の廊下に窪んだ空間が付け加えられるように成り立っている。

二階平面図②



可動間仕切りが閉じた状態から、水平スライド扉をそのままbの部屋へ引き延ばす。一般的な直線な廊下になるが、bの入り口は設けられなくなる。

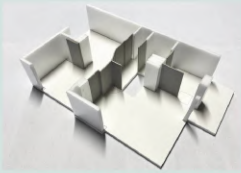
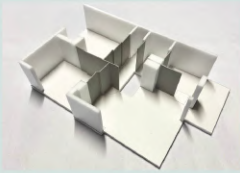
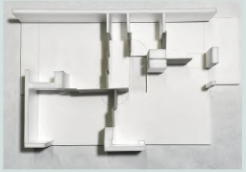
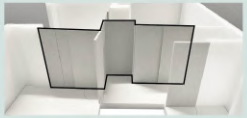
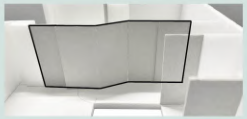
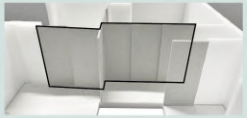
二階平面図③



通常のL字のホールだとa,b,cの部屋の入り口となる扉を設けることができる上に、cの部屋の扉の前に少し大きな空間を作ることができる。

通常のL字のホールだとa,b,cの部屋の入り口となる扉を設けることができる上に、広い空間を作ることができる。

可動間仕切りパターンの比較表

	1. 全開放	2. L字回転扉	3. 斜め扉	4. 水平スライド扉（オリジナル）
検討模型	一般的に可動間仕切りが開いた状態。	一般的に可動間仕切りが閉じた状態。	 二つの部屋が一体になる状態（スケッチ1より）。	 間仕切りがL字ではなく水平になった状態。こちらはオリジナルで作成（ホール付近可動間仕切りより）
平面比較	全ての部屋が繋がる	CとホールがL字に仕切られる	BとCが繋がり斜めに仕切られる	 どの部屋も水平に仕切られる
立面比較	全ての部屋が繋がる	 CとホールがL字に仕切られる	 BとCが繋がり斜めに仕切られる	 どの部屋も水平に仕切られる

これらの分析・論考から四つの可動間仕切りのパターンの模型を作成し、表にまとめ比較検討を行う。模型でのグレー部分が可動間仕切り、他の部分が壁となる。実際に建築設計で応用できるようにするため、これらの平面・立面比較を行う。

・平面比較

広い空間と狭い空間を対比的に作る

水平の間仕切りと比べると、L字や斜めでの間仕切りは窪んだ空間や飛び出た空間などが作れるため、広い空間と狭い空間を対比的に作り出せることができる。

・立面比較

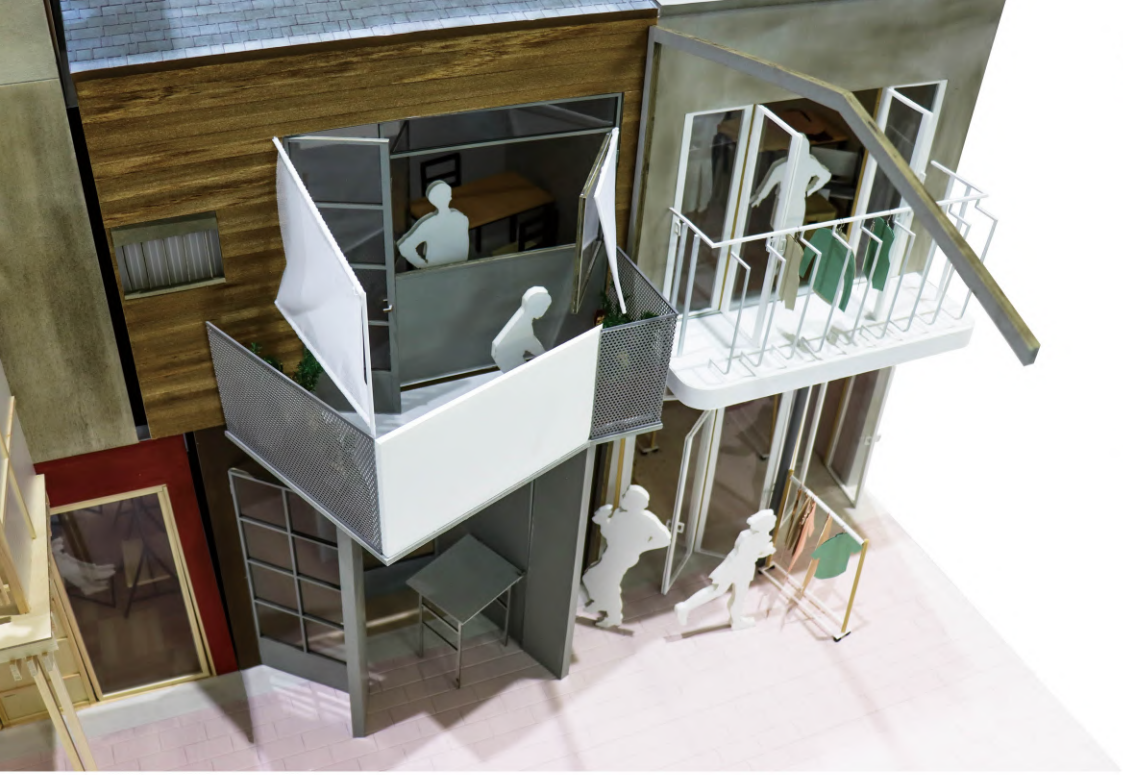
複数の面が様々な空間に対応する

水平の面と比べると、L字や斜めの面は水平の面に加えて複数の面を持つため、単純なスライド式の開閉方式とは異なることが予想される。
そうすることで内部と外部にも影響を与え、開閉による空間の組み合わせを限定せず様々に対応することができる。

↓

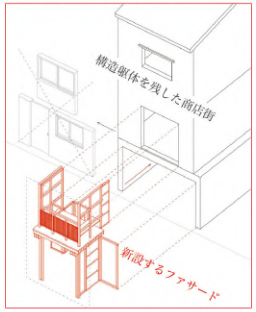
研究から設計へ

参考文献：『リートフェルト・シュレーダー邸：夫人が語るユトレヒトの小住宅』(2010)、イダ・ファン・ザイル

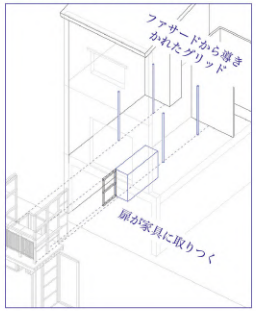


設計提案

・1.商店街のファサードのリノベーション



・2.ファサードに沿った内部空間のデザイン



扉に取りつく異なる柱の提案

敷地から三つの場所で詳細検討

研究で得られた可動間仕切りの手法

組柱

壁柱

丸柱

商店街の全体から異なるパターンの詳細な検討を行う。今回提案するのは組柱・壁柱・丸柱の三つであり、それに対して研究で得られた可動間仕切りの型を参照し、それぞれに転用させる。

1階平面図

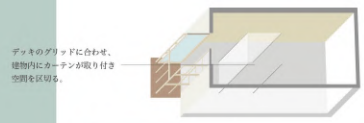
2階平面図

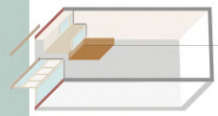
組柱と扉のふるまい

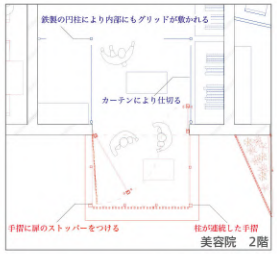
美容院＋ショップ
木造の組柱

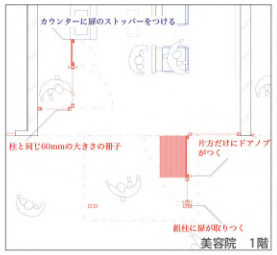
美容院の前の空間は、ミセ造りにもあるようなベンチが軒に折り畳められていて、座りながら路上空間の賑やかさを感じることができる。2階は美容系のショップとして扱い、空間はカーテンにより小割りされる。

組柱によるグリッドを組み込むことで内部にも新たに空間のグリッドを作り出し、変化の可能性を広げる。







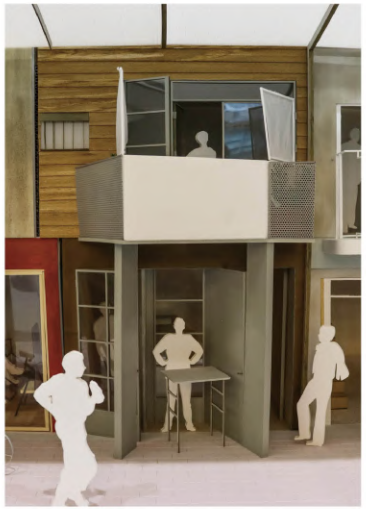


扉は開放されつつ、柱や家具に取りつく。

扉が閉じた状態　美容院

扉が開いた状態　美容院

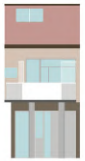
壁柱と扉のふるまい

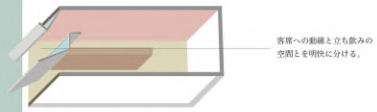


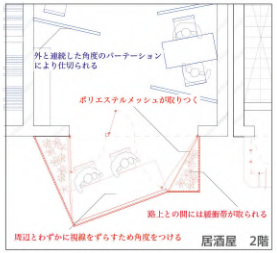
1.2階居酒屋
鉄骨造の壁柱

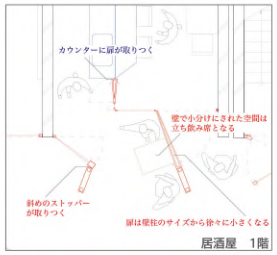
居酒屋の前の空間は立ち飲み用の空間として壁が可動することで一般動線とは切り離される。2階はデッキが角度を変えて開くことで視線をずらし、周りがなるべく気にならないようにしている。

壁による角度のついた空間により、建築内部に奥行きがうまれ、立体的な空間体験が行える。









各スペースは角度の異なるパーテーションで仕切られ、外へと連続する。

扉が閉じた状態　居酒屋

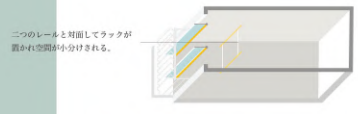
扉が開いた状態　居酒屋

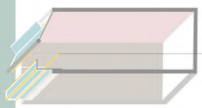
丸柱と扉のふるまい

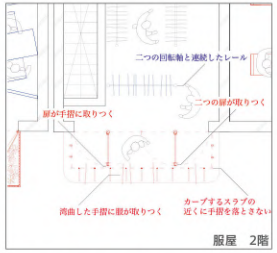
服屋＋アトリエ
鉄骨造の丸柱

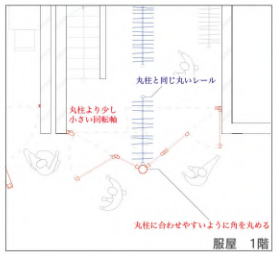
服屋のラックなどは、空間に無造作に置かれるが、建築の前の柱に向かって配置することで空間に規律が生まれる。2階の扉は前のすりりに取り付き、空間を小分けにする。

丸柱は象徴的な構造でありながら、扉やラック配置など日常空間の手がかりとなり、自然と溶け込んでいる。









開放された扉と外の柱に沿って、ラックが配置される。

扉が閉じた状態　服屋

扉が開いた状態　服屋